

事情聴取における聴取者の発問タイプと 被聴取者から得られる情報量の関連

山本 渉太¹⁾・山元 修一²⁾・渋谷 友祐³⁾・仲真 紀子⁴⁾

(警察大学校取調べ技術総合研究・研修センター¹⁾・宮崎県警察本部科学捜査研究所²⁾・

鳥取県警察本部科学捜査研究所³⁾・立命館大学総合心理学部⁴⁾)

2012年に、警察庁は日本で初めての事情聴取や取調べに関する教本を発出した。この教本には、被聴取者から質の高い供述を多く得るために適した発問タイプが紹介されている。事情聴取においては、どの質問をどのタイミングで用いるかが重要な課題であるが、これらの関連について検討した研究はほとんどない。そこで、本研究では、事情聴取の序盤、中盤、終盤における聴取者の発問タイプ（自由再生質問、焦点化質問、選択式質問、誘導質問）と被聴取者から引き出された情報量の関連について検討した。その際、言語情報のみに焦点を当てるために、チャットのソフトウェアを用いた聴取場面を設定した。参加者は34組のペアになった。各ペアのうち、一方がビデオクリップを呈示され、他方の参加者による聴取を受けた。その結果、自由再生質問は聴取の中盤において、他の発問よりも有意に詳細な情報を引き出していた。選択式質問は、聴取の序盤において、自由再生質問よりも引き出された情報が少なかった。これらの結果は先行研究と一致しており、聴取者は優先的に自由再生質問を用いるべきであることを示唆している。各発問をどの聴取段階において用いるべきかについても考察した。

キーワード：事情聴取、発問タイプ、目撃記憶、情報量

立命館人間科学研究, No.38, 47-57, 2019.

I. 緒言

被害者や目撃者などから得られる供述は、事件や事故の真相究明において重要な役割を担っている。事情聴取において正確な情報を多く得るための発問タイプについては、これまでに多数の検討が行われてきた（Oxburgh et al. 2010）。そして、特に子どもに対する事情聴取に関する研究から、自由再生質問（「どんなことがあったか話してください」のように、被聴取者の応答に制約をかけない発問）は、特定の内容について問う発問（「はい／いいえ」などの選択肢によ

る回答を求めるものなど）よりも被聴取者から多くの情報を引き出すことが繰り返して示されてきた（Hershkowitz et al. 2004; Lamb et al. 1996; Lamb et al. 2007）。また、聴取者に対して適切な訓練を行うと、自由再生質問の利用と、それによって得られる情報の量も増えることが示されている（Lamb et al. 2007; Orbach et al. 2000; Pompedda et al. 2015）。これらの研究成果は警察庁が作成した取調べ教本（取調べ（基礎編）：警察庁 2012）にも取り入れられ、現在では当該

本論文の内容は、第一著者が北海道警察本部科学捜査研究所に在職中に実施した研究に基づき、平成28年度に北海道大学大学院文学研究科へ提出した博士論文の一部を加筆・修正したものである。

教本を基に警察大専科などで警察官に対する各種訓練が行われている（栗野 2014）。

日本において事情聴取における聴取者の発問タイプの効果を検討した研究は数少ないが、仲（2011）は米国やイスラエルなどで用いられている NICHD（National Institute of Child Health and Human Development）ガイドラインに基づく司法面接の訓練プログラムの効果測定を行い、聴取者の発問タイプと被聴取者から得られる情報量の関連について、発話文字数を指標に検討した。聴取者は、研修プログラム参加前後に、約1分間の動画を観察した被聴取者からその動画の内容を聴取した。その結果、自由再生質問が、焦点化質問（「いつ／どこで／誰が／何を／どのように／どうした」などについて尋ねる発問）や選択式質問（「A か B か（C か）」の選択肢を提示する発問や「はい／いいえ」での応答を求める発問）よりも被聴取者の発話文字数を多く引き出すことが示された。この結果は、日本においても自由再生質問が被聴取者から多くの情報を引き出すことを示唆している。しかしながら、発話文字数が多いことと、有意な情報が多いことは必ずしも同義ではない。事情聴取の質を検討するためには、有意な情報を指標とする方がより適切であると考えられる。

また、事情聴取を通じて被聴取者から情報を得るためには、上記のとおり自由再生質問を優先的に用いるべきだと考えられるものの、各発問タイプが聴取のどのタイミングで用いられるとより効果的であるのかは、必ずしも明らかではない。この点について、自由再生質問がいずれの聴取段階でも被聴取者から多くの情報を引き出すこと（Lamb et al. 1996）、自由再生質問は、特に聴取序盤で用いられた場合に多くの情報を引き出すことが示されている（Hershkowitz 2001）。このように、自由再生質問については、いずれの段階でも情報収集に適しており、特に聴取序盤での使用が効果的であることが示唆さ

れるが、その他の発問についてはどうであろうか。

捜査実務的には、被聴取者の回答の自由度が高い自由再生質問のみでは、事件を立証するうえで必要な情報が被聴取者から十分に得られない可能性がある。必要な情報を収集するためには、状況や要請に応じて焦点化質問や選択式質問を用いることも求められるであろう（Fisher & Geiselman 1992=2012; 警察庁 2012）。とはいえ、聴取の冒頭において選択式質問で事件の細部の情報について聴取をし、その後大きな流れを自由再生質問で引き出すことは非効率である（Powell & Guadagno 2008）。また、選択式質問は、被聴取者の出来事を想起しようとする努力を阻害する可能性があり、さらに、選択式質問で得られる情報は、回答が聴取者の発問に関連するものに限定されることから、想定していなかった事実を掘り起こす機会を失うおそれもある（警察庁 2012）。したがって、仮に焦点化質問や選択式質問をするのであれば聴取の終盤で用いるべきだと考えられるが、これまでにこのことは実験的に検討されていない。そこで、本研究では聴取を序盤、中盤、終盤に分割し、それぞれの段階における発問タイプの出現傾向を調べるとともに、それらの発問がどの程度情報を引き出すのに効果的かを検討する。

なお、聴取段階について、Hershkowitz（2001）が聴取者の発問数を基にして4段階に分割した検討を行っている。しかしながら、現実の捜査場面では、被聴取者の都合などにより、定められた時間内に聴取を終わらせなければならないこともしばしばある。そのため、本研究では聴取時間に上限を設け、その旨聴取者に対して教示も行う。この教示により、聴取者は制限時間を意識しながら聴取を計画、実施することが期待される。以上のことから、本研究では、聴取時間を基にして聴取段階を分割して検討を行う。

また、これまでの事情聴取研究では、主に取

調べ室内で行われる対面式の事情聴取を想定したものが多かった。対面で行われる事情聴取では、聴取者のボディランゲージや表情なども被聴取者から得られる情報に影響するだろう (Opdenakker 2006)。実際に、聴取者が同じ発問をしたとしても、その聴取態度によって、被聴取者から得られる情報の量や質が異なることが指摘されている (山本他 2016)。対面式の聴取実験では、これらの言語情報以外の要因を取り除くことができないため、発問の形式を純粹に検討することが難しい。実際に、英国では、目撃者に対して目撃した内容について質問紙への記入を求める自己記入型面接 (Self-Administered Interview: SAI) が、捜査に活用されているという (Hope et al. 2011)。自己記入型面接は認知面接を基に作成されており、複数の目撃者から一斉に情報を収集できること、目撃者のスクリーニングにも活用できることなどの利点がある (Gabbert et al. 2009)。こうした利点は、コンピュータを媒介した聴取では遠隔地でも実施可能になるため、さらに大きくなるかもしれない。コンピュータを用いた代表的な聴取方法にはチャットと E メールがあり、前者は聴取者と被聴取者が時間を共有する一方、後者では共有しないという特徴がある (Opdenakker 2006)。E メールは両者が時間を共有しないため、自由度はより大きいですが、その反面、回収率が低下することが予想される。

以上のことから、本研究では、聴取者の発問タイプが被聴取者から得られる言語情報に与える効果について焦点を当てるため、チャットのソフトウェアを用いた事情聴取場面を設定した。そうすることで、対面による事情聴取への影響を排除するとともに、対面以外の方法を用いた事情聴取への示唆をも見据え、聴取者の発問タイプと被聴取者から得られる情報量の関連を検討する。情報量の指標には、発話に含まれる有意な刺激に関する情報の数を用い (Lamb et

al. 1996; Phillips et al. 2012)、また、事情聴取の段階にも焦点を当てる。

II. 方法

1. 実験参加者

実験への参加を承諾した警察官 68 名を聴取者、被聴取者に半数ずつ振り分けた。これらの参加者は、警察官として採用されてから 1 年未満の実務経験のない者であった。聴取者と被聴取者への振り分けは、寮生活などを通じて互いの会話特徴を知っている可能性がある同期生がペアにならないようにした以外は、ランダムに行った。実験中の手続きに不備があった 2 組を分析の対象から除外したため、分析の対象は 32 組のデータであった。聴取者は男性 32 名 (平均年齢 23.8 歳, $SD = 3.0$ 歳)、被聴取者は男性 30 名、女性 2 名 (平均年齢 22.7 歳, $SD = 3.3$ 歳) であった。

なお、実務経験のない警察官を参加者としたのは、聴取者や被聴取者のこれまでの捜査経験が聴取を通じて得られる情報に与える影響を排除するためであった。すべての実験参加者は警察学校教官を通じてリクルートされ、警察学校入校中に実験に参加した。

2. 刺激

仲 (2012) で約 5 分間の動画が用いられていたことを参考に、5 分 37 秒間の動画を実験参加者の面前に設置した CRT ディスプレイで呈示した。動画の内容は男性 2 名と女性 1 名が友人の女性 A の誕生日を祝うために買い出しなどの準備を行い、カラオケ店で飾り付けなどをし、その後他の女性 2 名が何も知らない女性 A を当該店まで連れてきて、6 名で誕生日会を行うものであった。登場人物 6 名は全員 20 歳代で、実験参加者とは面識がなかった。

なお、本研究で刺激として犯罪場面ではなく

日常場面を撮影した動画を利用した理由は以下の2点である。まず、刺激として犯罪場面を用いた場合、実験参加者に負の情動を喚起させる可能性があり、これは倫理的な観点から望ましいものではないと判断した。次に、実際の犯罪捜査の場面では、被聴取者が目撃した場面が犯罪場面そのものではなかったとしても犯罪捜査を行う上で重要な場面（例えば犯行前の犯人の様子や犯行後の足取りなど）として、後に警察官から目撃した場面の説明を求められる場合もある。これらの理由から、本研究では、被聴取者の負担に配慮しつつ、また、実際に目撃情報の報告を求められる可能性のある日常場面として、先に示した動画を刺激として用いた。

3. 手続き

実験は個別に実施した。聴取者と被聴取者は以下の手続きを一度も対面することなく、別室で行った。両者は実験者から実験概要の説明を受けた上で、承諾書（インフォームド・コンセント）に署名した。その後、被聴取者は刺激動画を視聴し、聴取者がパーソナルコンピュータでチャットのソフトウェアを用いた聴取を行った。被聴取者は刺激動画視聴後、「今見てもらった動画の内容について、これからチャットでの聴き取りを受けてもらいます」と教示された。一方、聴取者は刺激の内容を知らされておらず、「これからある動画を見てもらった人に対して、その動画内容をチャットで聴き取って下さい。聴き取りの時間は15分以内にして下さい」と教示された。15分以内という制限は、仲（2011）で動画内容の聴取時間を10分程度としていたことを参考にした。チャットのソフトウェアは、奈良県警察本部で開発された電子会議・情報共有ソフトウェア（「秘見呼」）であった。実験は2013年12月から2014年3月までの間に実施した。

なお、本研究は日本法科学技術学会倫理審査

委員会による審査を経たものである。

4. コーディング

コーディングは発話ごとに行った。本研究では、一方の参加者が文字列を送信してから、他方の参加者が文字列を送信するまでを各発話とした。

聴取者の発問については、警察庁（2012）や Lamb et al. (2007)、仲（2011）を参考に、自由再生質問（Open-ended）、焦点化質問（WH）、選択式質問（Option-posing）、誘導質問（Suggestive）の4種類に分類した。緒言にも示したとおり、本研究における自由再生質問とは、「どんなことがあったか話してください」のように、被聴取者の応答に制約をかけない発問である。焦点化質問とは、「いつ／どこで／誰が／何を／どのよう／どうした」などについて尋ねる発問である（例：それはいつのことですか）。選択式質問とは、聴取者が「AかBか（Cか）」の選択肢を提示する発問や「はい／いいえ」での応答を求める発問である（例：犯人は男の人でしたか）。誘導質問は、聴取者が期待する応答を暗示する発問である（例：犯人は男の人でしたよね）。1つの発話内に複数の発問が含まれる場合には、最後の発問を分類の対象とした。

測度としては、聴取者の発問別の頻度を算出するとともに、被聴取者の各発話から有意な情報（登場人物や活動、事物、場所、状況に関する情報）を抽出し、その合計を情報量とした。なお、映像と矛盾する内容や存在しない内容は、誤情報として別にカウントした。例えば、「ある女性（1）の35歳（誤情報1：実際は28歳）の誕生日（1）を友人（1）が祝う（1）パーティー（1）の映像でした（正しい情報量合計5）」のようにスコア化した（白石他 2006）。情報量の抽出は、被聴取者の発話に対してのみ行い、既出の情報はカウントしなかった（Lamb et al. 1996, Phillips et al. 2012）。

Ⅲ. 結果

1. コーディング

コーディングは2名の評価者が行った。Yi et al. (2016) に倣い、両者のコーディングの一致度を算出したところ、聴取者の発問タイプについては $\kappa = .94$ 、被聴取者の各発話に含まれる情報量については、級内相関係数が $r = .95$ であった。不一致項目についてはルールの再定義を行い、その定義に基づき再コーディングを行った (仲 2011)。なお、聴取者の発話は合計 273 あり、1つの発話内に複数の発問が含まれていたのは、そのうち7であった。

具体例を挙げると (原文ママ、被聴取者の応答における括弧内は情報量を示す)、聴取者の「あなたが見たものについてお話してください。」という発話は自由再生質問に、それに対する被聴取者の応答は「サプライズ (1) パーティー (1) です (正しい情報量合計 2)」とコーディングした。聴取者の「では、何人くらいでサプライズを行ったのですか？」という発話は焦点化質問に、それに対する被聴取者の応答は「3人 (1) くらいです。」とコーディングした。聴取者の「パーティの中に男性はいましたか？」という発話は選択式質問に、それに対する被聴取者の応答を「一人 (誤情報 1 : 実際は二人) いたと思

います」とコーディングした。聴取者の「主人公の女の子が複数の人に誕生日を祝ってもらっているビデオですね。」という発話は誘導質問に、それに対する被聴取者の応答を被聴取者「はい。(情報なし)」とコーディングした。

2. 各発問の出現頻度

聴取時間を基に、聴取を序盤 (聴取開始から5分未満の段階)、中盤 (5分以上10分未満の段階)、終盤 (10分以降の段階) の3段階に分割した。上記に基づく聴取段階別の聴取者の発問の頻度を Table 1 に示す。各段階における平均発問数は、序盤が 3.5 問、中盤が 2.6 問、終盤が 2.4 問であった。また、この方法に基づく分割の結果、分析の対象とした 32 組のうち、聴取の中盤がない (5分以上10分未満の間、聴取者の発問が一つもない) 組が1組、終盤がない (10分以降、聴取者の発問が一つもない) 組が4組あった。聴取段階別の各発問を一度以上用いた組の数と各発問によって一つ以上誤情報を得た組の数を Table 2 に示す。誤答を誘発する可能性が高い発問があるか否かを明らかにするべく、聴取全体において、聴取中に各発問を用いた組の数と、各発問によって誤情報を得た組の数の間に有意な偏りがあるか否かを、Fisher の直接確率検定によって検定した。その結果、有意な偏りは見

Table 1 Numbers of each question per interviewer.

	Open-ended	WH	Option-posing	Suggestive
Early stage	1.22 (.75) 0-3	1.34 (1.33) 0-6	.94 (.91) 0-3	- -
Middle stage	.66 (.60) 0-2	.81 (.78) 0-3	1.00 (1.22) 0-4	.13 (.34) 0-1
Later stage	.34 (.83) 0-4	.72 (.92) 0-4	1.28 (1.17) 0-4	.09 (.39) 0-2

Note. Upper stands indicate the average and SD, lower stands indicate the range.

Table 2 Numbers of pair that used each question and answered erroneously.

	Open-ended	WH	Option-posing	Suggestive
Early stage	28	22	19	0
	1	1	1	0
Middle stage	19	20	16	4
	1	2	2	1
Later stage	7	16	22	2
	0	0	5	0
Total	28	30	29	5
	2	3	8	1

Note. Upper stands indicate number of pair that used each question and lower stands indicate number of pair that provided false information.

られなかった ($p = .244$, Cramer's $V = .19$)。

3. 情報量

各組で最終的に得られた情報量の合計は、平均 19.88 ($SD = 4.92$), 最小値 11, 最大値 31 であった。そのうち、正しい情報についての情報量は、平均 19.34 ($SD = 4.78$), 最小値 11, 最大値 31, 誤った情報についての情報量は、平均 .53 ($SD = .88$), 最小値 0, 最大値 4 であった。また、聴取中、誤情報が全くなかった組の数は 20 組であり、残りの 12 組では、それぞれ、1 から 4 個の誤情報が存在した。

4. 発問タイプと情報量の関連

発問タイプと情報量の関連についての分析では、正しい情報についての情報量のみを用い、また、各組の各段階において、発問の種類ごとに、得られた情報量の平均値を算出して、以下の分析を行った。なお、誘導質問については聴取の序盤は出現せず、終盤は 2 組しか出現しなかったことから、以下の同段階に係る分析からは除外した。

発問のタイプ別、聴取段階別の、被聴取者か

ら得られた情報量の 1 発問あたりの平均値を Fig.1 に示す。まず、聴取段階別に、発問の種類を独立変数、被聴取者の発話に含まれた情報量を従属変数として、等分散を仮定しない一元配置分散分析を行った。以降の分析において、多重比較は Games-Howell 法で行い、分散分析の効果量には ε^2 (Okada 2013) を、多重比較の効果量には Hedges の g (大久保・岡田 2011) を用いる (効果量の横の () 内の数値は、非心分布に基づいて算出した効果量の 95% 信頼区間の下限と上限を示す)。

分散分析の結果、聴取の序盤、中盤において発問の種類の主効果が有意であった (Early stage: $F(2, 42.23) = 3.21, p = .050, \varepsilon^2 = .07$ (-.30, .21); Middle stage: $F(3, 26.27) = 14.95, p < .001, \varepsilon^2 = .32$ (.09, .47))。多重比較の結果、聴取の序盤では、自由再生質問が選択式質問よりも得られた情報量が有意に多かった ($t(42.70) = 2.53, p = .039, g = .73$ (.12, 1.33))。聴取の中盤では、自由再生質問が焦点化質問、選択式質問、誘導質問よりも、また、焦点化質問が誘導質問よりも、得られた情報量が有意に多かった (Open-ended vs WH: $t(22.18) = 3.40, p = .003, g = 1.31$ (.61,

1.99); Open-ended vs Option-posing: $t(28.20) = 3.49, p = .005, g = 1.18 (.45, 1.90)$; Open-ended vs Suggestive: $t(19.71) = 5.77, p < .001, g = 1.47 (.29, 2.62)$; WH vs Suggestive: $t(16.92) = 4.10, p = .004, g = 1.19 (.50, 2.31)$ 。また、選択式質問が、誘導質問よりも、得られた情報量が多い傾向があった ($t(17.94) = 2.73, p = .060, g = .81 (-.33, 1.92)$)。聴取の終盤では、発問の種類の主効果が有意でなかった ($F(2, 12.25) = 2.53, p = .12, \epsilon^2 = .07 (-.05, .25)$)。

次に、発問の種類別に、聴取段階を独立変数、情報量を従属変数として、等分散を仮定しない一元配置分散分析を行った。その結果、自由再生質問では、聴取段階の主効果が有意であった ($F(2, 14.61) = 4.37, p = .033, \epsilon^2 = .16 (-.02, .33)$)。多重比較の結果、自由再生質問により得られた情報量は、聴取の中盤で序盤よりも有意に多かった ($t(24.35) = 3.01, p = .016, g = 1.00 (.38, 1.61)$)。焦点化質問および選択式質問については、聴取段階の主効果が有意でなかった (WH: $F(2, 33.34) = .37, p = .69, \epsilon^2 = -.02 (-.04,$

$.07)$; Option-posing: $F(2, 25.89) = .40, p = .674, \epsilon^2 = -.02 (-.04, .09)$)。

IV. 考察

本研究では、事情聴取のどの段階において、どのような発問が、被聴取者から多くの情報を引き出すのかを、対面による影響を排除して検討した。そして、結果から、自由再生質問は、聴取の序盤において選択式質問よりも、聴取の中盤においてはいずれの質問よりも正確な情報を多く引き出すことが示された。この結果は、被聴取者の応答に制約をかけない自由再生質問は、特定の内容について問う発問よりも被聴取者から多くの情報を引き出すという多くの先行研究と一致している (Oxburgh et al. 2010)。対面による影響を排除した本研究においても、自由再生質問の有効性が再確認されたといえるだろう。

本研究の結果をふまえ、事情聴取において被聴取者から効率的に情報を収集する方法を考察

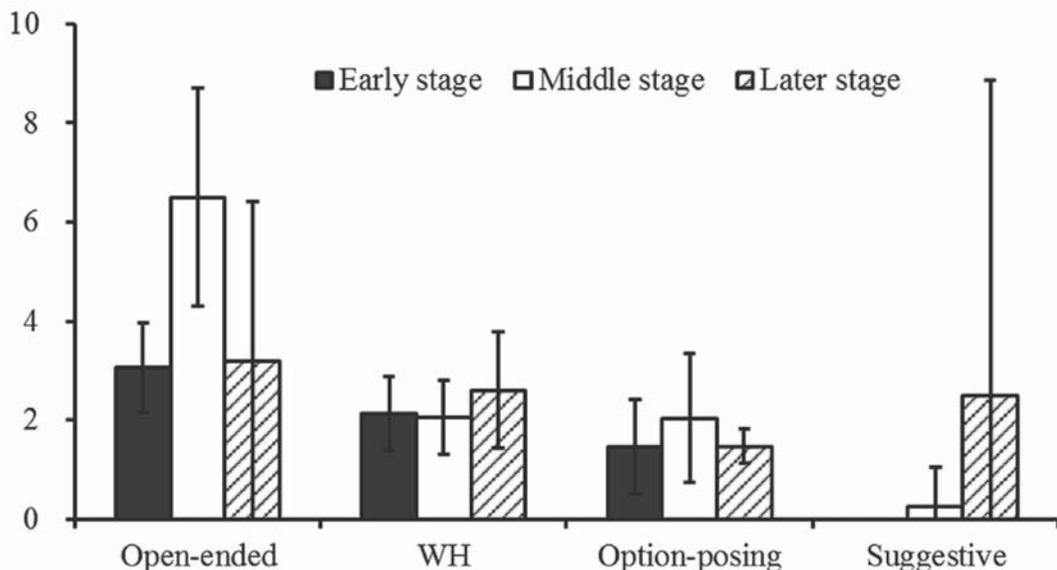


Fig. 1 Average amount of correct details in response to each type of questions and stage of interviews. Error bars indicate 95% confidence interval.

すると、聴取中盤までは自由再生質問を優先的に用いることが重要である。焦点化質問や選択式質問はいずれの聴取段階でも得られる情報量に差異がなかったことから、自由再生質問を用いた後に、それまでに聴取した内容を確認し、自由再生質問では得られなかった必要情報を引き出す目的で用いるのが効果的だといえるだろう。誘導質問については、先行研究でも焦点化質問や選択式質問と比較して出現頻度が少なく(Lamb et al. 1996; Orbach et al. 2000; Pompedda et al. 2015)、本研究でもほとんど出現しなかったが、聴取中盤で他の質問よりも得られる情報量が少なかったこと、また、特定の事実の存在を前提としているため、被聴取者にそのことについての記憶がない場合にも供述を引き出してしまう可能性があることから(警察庁 2012)、用いるべきではないと考えられる。時間経過に伴い、発問をオープンなものから焦点化していく方法は、取調べ教本でも推奨されており(警察庁 2012)、本研究は、実験で各発問の聴取段階別の効果を検討したうえで、こうした発問方法が有効であることを示した点に最大の価値があるといえる。実際の聴取を検証した研究でも同様の発問方法の有効性が事例として報告されているが(Griffiths et al. 2011)、自由再生質問から焦点化していく発問方法を用いた聴取の方が、そうではない聴取者と比較して、被聴取者から多くの情報量を得られているのかについても、実験参加者数を増やしたうえで、今後検討する必要がある。

しかしながら、本研究では、Hershkowitz (2001) や Lamb et al. (1996) で得られた知見と反する結果も示された。まず自由再生質問は序盤よりも中盤で有効であったことである。このことについては、聴取の冒頭で NICHD ガイドラインや認知面接などで設定されているグラウンドルール(聴取における約束事、「覚えていることは、些細なことでも全て報告してください」

など、通常は5つ程度行う：仲 2012)を教示していたならば、序盤に得られた情報量がより多かった可能性がある。次に、聴取終盤では、自由再生質問と焦点化質問や選択式質問で得られる情報量に差異は認められなかったことである。このことは、本研究では聴取方法としてチャットを採用したことの一因があると考えられ、報告内容の詳細さの点から解釈できる。例えば、虐待の被害が疑われる子どもへの対面式の事情聴取について検討した Phillips et al. (2012) では、20分未満の聴取で、平均で80以上の情報量が得られた。これに対し、本研究では最大でも31の情報量しか得られなかった。チャットを用いた聴取では、文字を入力する時間を要するため、対面式の聴取と比較して、情報提供に時間がかかる。そのために被聴取者は大枠の内容しか報告せず、結果として得られた情報量が先行研究よりも少なくなったと考えられる。本研究では実験参加者に文字タイプの得手不得手を確認していないものの、特に文字タイプが不得手な実験参加者は、この傾向が顕著であったと推察される。大枠の内容しか報告しなかったことは、誤った情報がほとんど報告されなかったことにもつながっているだろう。これらのことをふまえると、チャットを用いた聴取は遠隔地でも実施可能であるだけでなく、得られる情報は相対的に正確であるといった利点がある。しかしながら、得られる情報量が対面での聴取と比較して少ないことから、自己記入型面接と同様、多数の目撃者がいる場合のスクリーニング目的など、補助的な使用に留めるべきだと考えられる。

最後に、本研究の課題と今後の展望を述べる。本研究では被聴取者から報告される誤情報が少なかったが、このことは刺激観察直後に聴取を行ったことも一因である。実際の捜査では、事件や事故の目撃直後に聴取を実施することが困難な場合もあり、刺激呈示から聴取までの時間を操作したさらなる検討が必要である。また、

講義の内容や時期などが異なっていたために本研究では分析に含めなかったが、発問タイプに関する講義の受講経験がある実験参加者もあり、事前知識の差異が結果に影響した可能性がある。事情聴取研究の目的の一つは、聴取者の聴取技術の向上に資することであるため、受講経験が与える影響を検討すると同時に、有効な訓練方法に関する知見を提供する研究が求められる。

謝 辞

本研究実施に際し、平成26年度北海道大学大学院文学研究科「共生の人文学」プロジェクトの助成を受けた。また、本研究実施にあたり、北海道警察学校および宮崎県警察学校の入校生と教官の皆さまに、ご協力を賜りました。ここに記して、深謝いたします。

引用文献

- 栗野友介 (2014) 取調べ技術総合研究・研修センターにおける研修等の実施状況. 警察学論集, 67 (12), 21-33.
- Fisher, R. P., and Geiselman, R. E. (1992) *Memory-enhancing techniques for investigative interviewing: The cognitive interview*. Springfield: Charles C. Thomas Publisher. 宮田洋 (監訳) (2012) 認知面接——目撃者の記憶想起を促す心理学的テクニック——. 関西学院大学出版会.
- Gabbert, F., Hope, L., and Fisher, R. P. (2009) Protecting eyewitness evidence: Examining the efficacy of a Self-Administered Interview tool. *Law and Human Behavior*, 33, 298-307.
- Griffiths, A., Milne, B., and Cherryman, J. (2011) A question of control? The formulation of suspect and witness interview question strategies by advanced interviewers. *International Journal of Police Science and Management*, 13, 255-267.
- Hershkowitz, I. (2001) Children's responses to open-ended utterances in investigative interviews. *Applied Developmental Science*, 3, 28-33.
- Hershkowitz, I., Holowitz, D., Lamb, M. E., Orbach, Y., and Sternberg, K. J. (2004) Interviewing youthful suspects in alleged sex crimes: A descriptive analysis. *Child Abuse and Neglect*, 28, 423-438.
- Hope, L., Gabbert, F., and Fisher, R. P. (2011) From laboratory to the street: Capturing witness memory using the Self-Administered Interview. *Legal and Criminological Psychology*, 16, 211-226.
- 警察庁 (2012) 取調べ (基礎編). 警察庁ホームページ (2017年10月29日取得 <https://www.npa.go.jp/sousa/kikaku/20121213/shiryuu.pdf>).
- Lamb, M. E., Hershkowitz, I., Sternberg, K. J., Esplin, P. W., Hovav, M., Manor, T., and Yudilevitch, L. (1996) Effects of investigative utterance types on Israeli children's responses? *International Journal of Behavioral Development*, 19, 627-637.
- Lamb, M. E., Orbach, Y., Hershkowitz, I., Esplin, P. W., and Horowitz, D. (2007) Structured forensic interview protocols improve the quality and informativeness of investigative interviews with children: A review of research using the NICHD investigative interview protocol. *Child Abuse and Neglect*, 31, 1201-1231.
- Lamb, M. E., Orbach, Y., Hershkowitz, I., Horowitz, D., and Abbott, C. B. (2007) Does the type of prompt affect the accuracy of information provided by alleged victims of abuse in forensic interviews? *Applied Cognitive Psychology*, 21, 1117-1130.
- 仲真紀子 (2011) NICHD ガイドラインにもとづく司法面接研修の効果. 子どもの虐待とネグレクト, 13, 316-325.
- 仲真紀子 (2012) 面接のあり方が目撃した出来事に関する児童の報告と記憶に及ぼす影響. 心理学研究, 83, 303-313.
- Okada, K. (2013) Is omega squared less biased? A comparison of three major effect size indices in ONE-WAY ANOVA. *Behaviormetrika*, 40, 129-147.
- 大久保街亜・岡田謙介 (2012) 伝えるための心理統計——効果量・信頼区間・検定力——. 勁草書房.
- Opdenakker, R. (2006) Advantages and disadvantages of four interview techniques in qualitative research. *Forum: Qualitative Social Research*, 4 (11).

- Orbach, Y., Hershkowitz, I., Lamb, M. E., Sternberg, K. J., Esplin, P. W., and Horowitz, D. (2000) Assessing the value of structured protocols for forensic interviews of alleged child abuse victims. *Child Abuse and Neglect*, 24, 733-752.
- Oxburgh, G. E., Myklebust, T., and Grant, T. (2010) The question of question types in police interviews: A review of the literature from a psychological and linguistic perspective. *The International Journal of Speech, Language and the Law*, 17, 45-66.
- Phillips, E., Oxburgh, G., Gavin, A., and Myklebust, T. (2012) Investigative interviews with victims of child sexual abuse: The relationship between question type and investigation relevant information. *Journal of Police and Criminal Psychology*, 27, 45-54.
- Pompedda, F., Zappalà, A., and Santtila, P. (2015) Simulations of child sexual abuse interviews using avatars paired with feedback improves interview quality. *Psychology, Crime & Law*, 21, 28-52.
- Powell, M. B., and Guadagno, B. (2008) An examination of the limitations in investigative interviewers' use of open-ended questions. *Psychiatry, Psychology and Law*, 15, 382-395.
- 白石紘章・仲真紀子・海老原直邦 (2006) 認知面接と修正版認知面接における出来事の再生と反復提示された誘導情報の情報源再認. 認知心理学研究, 4, 33-42.
- 山本渉太・仲真紀子・和智妙子・渡邊和美・横田賀英子・富長理恵子 (2016) 捜査面接におけるラポール形成方略と発問方法の効果 (4). 日本法科学技術学会誌, 21 (別冊), 177.
- Yi, M., Jo, E., and Lamb, M. E. (2016) Effects of the NICHD protocol training on child investigative interview quality in Korean police officers. *Journal of Police and Criminal Psychology*, 31, 155-163.

(受稿日 : 2017. 11. 22)

(受理日 [査読実施後] : 2018. 3. 18)

Original Article

Relation between Interview Question Types and the Amount of Information Collected from Witness Interviews

YAMAMOTO Shota ¹⁾, YAMAMOTO Shuichi ²⁾,

SHIBUYA Yusuke ³⁾ and NAKA Makiko ⁴⁾

(Research and Training Center for Interview and Interrogation Techniques, National Police Academy ¹⁾/

Forensic Science Laboratory, Miyazaki Prefectural Police Headquarters ²⁾/

Forensic Science Laboratory, Tottori Prefectural Police Headquarters ³⁾/

College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University ⁴⁾

In 2012, the National Police Agency released the first Japanese investigative interviewing manual that introduces effective question types to obtain high-quality and high-volume statements from interviewees. Few studies have examined the interaction between the types and timing of these questions, and this is an important issue in witness interviews. Hence, this study investigates the relation between interview question types (open-ended questions, WH questions, option-posing questions, and suggestive questions) and the amount of information collected from interviewees in the early, middle, and later stages of interviews. To focus only on verbal information, interviews were set up using a chat application. Thirty-four pairs of participants were recruited; one member of each pair was shown a video clip and was interviewed by the other member. The results reveal that using open-ended questions drew significantly more detailed responses than other questions during the middle stage of interviews. Meanwhile, option-posing questions elicited less information than open-ended ones in the early stage of interviews. Consistent with previous studies, these results suggest that interviewers should prioritize the use of open-ended questions. This study also discussed the best timing to use for each question.

Key Words : witness interview, questioning type, eyewitness memory, amount of detail
RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.38, 47-57, 2019.
